

## エピソードゼロ

### 高橋悠也

遠い過去のようで、昨日のことに思い出す。

かつて大学の社交クラブで出会い意気投合した我々4人は、時が経つのも忘れて語り合った。仮面を被って出席することが義務付けられていたのは主催者のちょっとした遊び心だろうか。

「人が仮面を被ることなく、本能のままに生きられる世界は、いつ訪れるのだろうか」

そう、『博学な男』が告げた。

「興味深い問題だな。確かに今、仮面を被って素顔を見せずにいると、本音で語り合える気がしている」と『私』が応えた。

「逆に言えば、素顔の時ほど建前を気にすることだろ。人間ってのは醜い生き物だな」と『薄情な男』が続けた。

「全員が全員、そうとは限らないだろう。なんなら今ここで仮面をとってみるか？」と『誠実な男』が提案した。

「面白い。それで我々の世界が変わるのか？ それとも何も変わらないのか？」と私が乗っかり、我々は仮面を外して素顔を曝け出した。

今にして思えば、それが全てのはじまりだったのかもしれない。

仮面を外した博学な男が告げた。

「仮面をとったところで何も変わらないな。本当の仮面を外さない限り……」

その日を境に、大学の盟友だった我々はそれぞれ、別々の道へと歩み出すこととなった。

あの時、仮面を外していなければ、我々4人は全く違う運命をたどっていたのかもしれない。そしてきっとその方が幸せになれたに違いない。

◇

七色の文化が集まる都・虹顔市。ここでは多種多様な人々が暮らし、人生を謳歌していた。だがしかし、人々はまだ気付いていなかった。いや、気づかないままであった方が幸せというのが正確な言い方だろうか……。

我々の社会には、悪しき志しを抱いて社会の転覆を目論む、とある秘密結社が存在していた。

数多くの狂信者を従えて、裏社会に蔓延り、暴力と謀略の限りを尽くす。罪なき人々を拉致して洗脳し、自分たちの戦闘員として操る。やつらを野放しにしていれば、人々の暮らしが脅かされることは目に見えていた。

虹顔市の一大財閥の総帥である私は、財閥の情報網から秘密結社の存在に辿り着き、やつらの潜伏先であるアジトに単身乗り込むとしていた。無論、たった一人の力で壊滅に追い込めるほど、秘密結社は容易い組織ではない。

ただ、「彼」を救わなければ……その一心で私は自分を奮い立たせていた。

私は秘密結社のアジトに乗り込むと、歩哨の目を掻い潜り、社会からは隔絶された地下施設に潜入した。

見たこともないような装置や水槽が立ち並んだそこは、まるで怪物の開発施設のようなものであった。

そんな施設の最深部に、誠実な男は眠っていた。

「起きろ！ 私だ！」

「……誰だ、お前は」

かつての大学の同志である私のことを彼は覚えていなかった。それも無理はない。秘密結社の人体実験によって記憶を改竄されていたのだから。私はあらかじめ、決死の思いで秘密結社から取り返していた、とある輝く石を取り出した。

その名も『カオストーン』。

その石をかざすと、綺羅びやかな光を放って彼を優しく包み込む。私の調査によると、カオストーンと呼ばれる石には人間の記憶の一部を封じ込める力があるようだった。偽りの記憶を闇に葬り去り、真実の記憶を呼び覚ます、救いの光だ。

「……俺は……なぜここに……！」と彼は戸惑いの表情を見せる。

「詳しい話をしている暇はない……！」 すぐにこの施設から脱出するぞ……！」

「……君は俺を助けに来てくれたのか？」

「……当然だろう。生涯の友を見捨てるやつがどこにいる？」

その時だった。物々しい風貌の戦闘スーツに身を包んだ一人の狂戦士が現れた。事前の調査によってその危険性については把握していた。秘密結社内部でカオスライダーと呼ばれているその狂戦士は、秘密結社に忠誠を誓い、警察や軍の武力では太刀打ちできないほどの破壊力を持つ極めて危険な存在だ。

「……侵入者は処刑する……！」

私と彼は無我夢中で逃げた。

武力を持たない我々には到底勝ち目のない相手だ。地下施設の迷路のような回廊を、右に、左に、駆け抜ける。侵入を知らせるサイレンがけたたましく鳴り響き、我々の退路を断つべく大勢の戦闘員が駆けつける中、我々はなんとか施設の外へと逃げ遂げた。

とある廃教会にて、私と彼はこの街の未来を憂いていた。秘密結社が存在している限り、人々の暮らしに安寧はない。やつらは心が弱った人間を拉致・洗脳し、自分たちの戦闘員に変えて利用していた。そして社会に狂信者を紛れ込ませ、裏社会を掌握しようとする。

「真っ向から戦うしかない」

誠実な男はそう告げた。確かに彼は秘密結社の人体実験によってカオスライダーの力を宿していた。彼の手をもってすれば秘密結社に対抗できるかもしれない。しかし破壊的なまでの力を操れば身体への負担は計り知れない。己の命を削ることさえある。

だが同時に、彼が揺るぎない正義感を持つ男であることも知っていた。彼が覚悟を決めるのなら、私も逃げるわけにはいかない。

教会の神像の前に、我々は固い約束を交わした。

「……たとえどちらかの命が尽きたとしても」と彼は告げる。

「……生き残った者が必ず遺志を受け継ぐ」と私が続ける。

「……秘密結社カオスイズムに対抗し続けるために」

「……我々の覚悟と決意が永遠に続いていくように」

私と彼は息を合わせ、同時に告げる。

「後世へ受け継いでいく」

その名も『永遠の契約』

お互いに決して破ることがないと誓い、交わした契り。

彼は秘密結社に立ち向かう戦士として。

私は彼をサポートするエージェントとして。

私はコスモス財閥の総帥としての財力と人脈の全てを利用し、巨大テクノロジー企業を仰いだ。

秘密結社の人体実験によって彼の体内に埋め込まれたカオスライダーの

テクノロジを解析し、カオスイズムに対抗できる力として利用すべく研究・開発を進めた。

彼もまたその絶大な力をコントロールできるよう、己の鍛錬を重ねた。

やがて万全な準備を整え、我々は再び秘密結社のアジトへとやってくる。が、秘密結社は我々の思惑を見透かすかのように、屈強な狂戦士カオスライダーを差し向けた。

秘密結社を壊滅させるためには、避けては通れない戦いだ。そのカオスライダーもまた、彼のように、記憶を改竄された無実の人間である可能性が高い。

彼は戦う覚悟を決め、カオスライダーと対峙した。

「お前も俺と同じように人体実験を受けた身体だ。裏切り者のお前にカオスの力は使いこなせない……！」と、カオスライダーが恫喝する。

しかし彼は動じなかった。

永遠の契約を交わし、揺るぎない信念の眼差しを向ける。

「俺は俺の意志で！ 守りたいものを守る！ 守るべきものを守るんだ……！」

彼は決意の言葉を叫ぶと、特殊な指輪を嵌めた。

「変身……！」

次の瞬間、腰にカオスドライバーと呼ばれるベルトが出現。彼が指輪をカオスドライバーにかざすと、勇ましい究極の戦士・仮面ライダーへと変身を遂げた。

カオスイズムによる洗脳から解放され、正しき力を宿した彼が、カオスライダーと正面からぶつかり、火花を散らせながら戦闘を繰り広げる！ 激しい衝撃音が大地を揺らす。まるでトラックが衝突するような一撃

一撃の重みがお互いの身体に響き渡る。命を削る音だ。そして彼の覚悟がカオスライダーを打ち破った。

カオスライダーの変身が解け、現れた正体に我々は言葉を失った。かつての大学の同志であり、薄情な男がそこにいたからだ。

「……こんなことなら……お互いに素顔を曝け出さないままであれば

……よかったのかもな」

我々は悲しき運命に打ちひしがれそうになったが、ここで立ち止まっていられない。前に進むしかない。

そう奮い立って先に進もうと駆け出した足は、一対しかなかった。

カオスライダーとの戦いに全ての力を費やした誠実な男は、立ち上がる事ができないまま、倒れ果ててしまったのだ。

「おい、大丈夫か!? 起きろ！」

「……すまない……俺はここのままでのようだ……」

私は即座に後悔した。仮面ライダーとして戦うことの代償がこれほどまでとは思ってもよらなかったからだ。しかも初めての相手がかつての同志だったことが、彼の不屈の心さえも砕いてしまったのかもしれない。

次第に意識が遠のきかけていく彼を、私はただただ抱きしめてやることしかできなかった。

そこへまるで音もなく近づいてくる存在がいた。神々しい装飾が施された仮面を被り、近づいてくる一人の男。歪んだ思想を掲げ、秘密結社カオスイズムを創立した人物——組織内部から『首領』と崇められている男だ。

「……この世界は私が創り変える」と首領の男が告げた。

その声を聞いた時、私は全てを悟った。

我々の運命はあの時、取り返しのない方向へと傾いてしまっていたことを。神々しい仮面の奥には、かつて共に世界の本質について語り合った博学な男の眼差しが隠れているに違いない。

「目を覚ませ！ お前はそんな人間じゃなかったはずだ！」

「お前に見せていた私は、一面的な存在に過ぎない。人が仮面を被ることなく、本能のままに生きられる世界……それこそがカオスイズムの理想郷」

「大切な大学の同志まで洗脳して、何が理想郷だ……！」

「……洗脳？ 浅はかな知識で論ずるな。彼らは解放されるはずだった

んだよ。この歪んだ世界の呪縛からね。そしていずれ気付くのだ……  
救われたとね」

「神にでもなる気か……!」

「すでに私は神にも等しい力を手に入れた」

私の目の前の男はそう言うと、神々しい仮面に手をかざした。

仮面全体が宝石のような輝きに包まれており、仮面の眼差しが私の心を射抜くように妖しく光を放つ。

「……惜しい人材を二人亡くした。いずれ私の両腕となるはずの男たちだったか」

そう言うと、二つのカオストーンを取り出した。

その片方の石は見覚えのある光を放っていた。

今は亡き誠実な男の記憶を宿したカオストーンと瓜二つの光。彼の心を形作る欠片だ。とすればもう一つの石は薄情な男の記憶を宿したカオストーンか……。

「その石を返せ! 彼らはお前の傀儡(くわい)じゃない!」

気がつくくと、私は無我夢中で首領に飛びかかり、彼の手からカオストーンを奪い取ろうとした。

……後のことはよく覚えていない。

気がつくくと、秘密結社カオスイズムの地下施設にいたはずの私は……見知らぬ森の中にいた。自らの足でここまでたどり着いたのか、あるいは首領の手によって放り出されたのか、定かではない。

ただ、一つだけ確かなのは、私の手に、誠実な男のカオストーンが握られていたことだ。

戦闘によって息絶えたかつての同志たちの姿はどこにもなかった。おそらくカオスイズムによって回収されたに違いない。

彼らの犠牲を無駄にするわけにはいかない。

私は永遠の契約を胸に刻み、カオスイズムに対抗すべく動き出した。

亡き彼の心が宿った形見のカオストーンと共に。

かくして私は、協力関係にあった巨大テクノロジー企業と共に、新たな施設の研究開発を急いだ。

この世界の運命を守るため、いずれ戦う同志たちのために、仮面ライダーを育成するための極秘基地「ライダーステーション」だ。

今後は、私がエージェントとして、誠実な男のように秘密結社に洗脳された者たちを救い、この世界の運命を守る仮面ライダーとして育てていくことを誓った。

彼と交わした永遠の契約を果たすために。

◇

なぜ私がここまでの回想録を書き記したのか。

それは私に万が一のことがあった時のため、私と彼が歩んだ軌跡を手記として残しておきたかったからだ。記憶と歴史の改竄が常套手段だった秘密結社カオスイズムに対抗するためにも。

この手記は決してやつらの手の届かないところに封印しておくことにする。たとえ全ての事実が隠蔽され、世界の歴史が歪められたとしても、この手記だけは「永遠の記録」として残り続ける。

たとえこの私の命が尽きることがあろうとも、私の意志は子供に受け継がれるであろう。

その時は、初代仮面ライダーのカオストーンが道標となって、後世の者たちを導いていくに違いない。

まだ運命を知らぬ我が子よ。

いつか君が、エージェントとしての人生を歩む道を選んだとしたら、多くの仮面ライダーと絆を深めて共に戦い抜いていく君を、心から応援したいと思う。

この世界の未来は、我々エージェントの手にかかっている!